

《症例報告》

胃癌による骨髓癌腫症の診断および治療効果判定に  
骨髓シンチグラフィが有用であった 1 例

今井 幸紀\*      朝倉 泰\*      木下 学\*      末吉 宰\*  
江口有一郎\*      太田 慎一\*      藤原 研司\*      鈴木 健之\*\*  
宮前 達也\*\*

要旨 骨髓癌腫症はがんが播種性に骨髓に転移し、播種性血管内凝固症候群 (DIC) を合併するさわめて予後が不良な病態である。症例は 32 歳の男性で、Borrmann 4 型胃癌に DIC の合併を認めた。さらに骨シンチグラフィにて多発性の異常集積、骨髓穿刺にて癌細胞を認め、胃癌による骨髓癌腫症と診断した。<sup>111</sup>In-Cl<sub>3</sub> 骨髓シンチグラフィにて central marrow failure, peripheral expansion の所見が認められた。化学療法にて DIC から離脱した時の骨髓シンチグラフィでは体幹の骨髓が明瞭に描出され、骨髓像の改善が確認された。さらに化学療法経過中に血小板数が減少し、DIC の再燃が危惧された際の骨髓シンチグラフィ再検でも骨髓像の改善は持続していた。退院後も DIC の再燃はなく経過した。<sup>111</sup>In-Cl<sub>3</sub> による骨髓シンチグラフィが、骨髓癌腫症の診断および化学療法の治療効果判定に有用であった。

(核医学 38: 237-240, 2001)